

令和元年6月11日現在

機関番号：34509

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K17207

研究課題名(和文) 在日朝鮮人のディアスポリックな経験とナショナル・アイデンティティに関する研究

研究課題名(英文) Research on the Diasporic Experience and National Identity of Zainichi Koreans

研究代表者

李 洪章 (Lee, Hongjang)

神戸学院大学・現代社会学部・准教授

研究者番号：20733760

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、在日朝鮮人の民族や国家をめぐる経験と日常の実践に関する質的調査を通して、そのナショナル・アイデンティティの複雑性を描き出すことを目的とする。

個人レベルでの民族/国家概念について考察する本研究では、主に以下の3つを具体的な調査対象とした。結婚移住による在日朝鮮人女性の韓国経験、在日朝鮮人大学生による朝鮮民主主義人民共和国への「祖国訪問」を通じたナショナル・アイデンティティの構築、在日朝鮮人運動において「民族/国家」がいかにして語られてきたのかについての言説分析。

研究成果の学術的意義や社会的意義

在日朝鮮人のナショナリズム研究においては、それが安易に「本国志向」とみなされてきた状況から、民族性や本国との紐帯の強弱に着目してその多様性を描き出そうとする研究や、反本質主義の立場から、その排他性を詳らかにする研究がみられたが、本研究ではそれに対して、研究者による当為を排しつつ、なおかつネーションをめぐる言論が常に政治性を帯びるという原理そのものに着目した。近年、そうした構築主義的な立場からの研究が行われるようになりつつあるが、それに対して学術的貢献が果たせるのではないかと考える。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to portray the complexity of national identity through a qualitative investigation of Zainichi Koreans' experience concerning their nation and state and their everyday practice.

This study which examines the concepts of ethnicity and nation on an individual level mainly focused on the following three concrete points. 1) Zainichi Korean women's experience of ROK(South Korea) by immigrating there due to a marriage, 2) Construction of national identity through the visit to DPRK (North Korea) or "the visit to the mother country" by Zainichi Korean college students, 3) A discourse analysis on how the "ethnicity and nation" has been discussed in Zainichi Korean movements.

研究分野：社会学

キーワード：在日朝鮮人 祖国・母国 ナショナル・アイデンティティ ディアスポラ エスニシティ 結婚移住 祖国訪問

1. 研究開始当初の背景

在日朝鮮人研究を含め、エスニック・マイグレーション研究の多くは、エスニシティ/ナショナリティのあり方を、主に祖国/民族との紐帯の強弱に基づいて説明しようとしてきた。そうした傾向は、エスニシティ/ナショナリティの構築性を暴露すべく、個人の移動がいかにか構造的な文脈に規定されるのかを解き明かそうとするがゆえに生じたものであった。しかし、こうした研究は、結果として、エスニック・マイノリティの存在を、エスニック/ナショナルな次元に押し込めてしまうことになる。

そうしたマクロ・アプローチに対して、近年、在日朝鮮人個人によって語られる「民族」や、在日朝鮮人をめぐるミクロなコミュニケーションのあり様に着目する研究が行われるようになった(倉石 2006、橋本 2010、山口 2011 など)。これにより、在日朝鮮人個人が、自身の生活世界に根差して、いかに国家や民族を理解しているのか、そして、紋切り型の「民族」観ではなく、個人個人の多様な民族経験を共有するための「開かれた共同性」を実現するための実践のあり様が、徐々に描かれるようになってきた。

2. 研究の目的

ただし、従来のイデオロギーとしてのナショナリズムと、個人のナショナル・アイデンティティとを混同するような認識は、一般社会においても、アカデミズムにおいても、いまだ根強い。そこで本研究は、こうしたミクロ・アプローチをさらに発展させるべく、あえてナショナルな文脈に着目し、在日朝鮮人をとりまくトランスナショナルな生活世界の実態を描出することを試みる。

具体的には、「帰国」ではない形で本国への移動が漸増している点、高度資本主義社会である居住国・日本での生活に概ね適応するなかで「祖国」との関係性も大きく変容している点に着目した。

課題としては、以下の3点を設定した。

【課題A】在日朝鮮人のナショナリズムをとりまく言説空間に関する分析

近年、日本における保守とリベラルのねじれ・転倒・奇妙な合致が盛んに指摘されている。すなわち、従来の「リベラル」から社会的公正への志向性がそぎ落とされ、多元性への寛容という理念のみを踏襲した「日本型リベラル」と、保守主義が前提とするはずの近代がもたらした自由の尊重を置き去りにし、復古主義と新自由主義とを結合させた「日本型保守」とが、倒錯した関係を結んでいるのである。

そのような状況で、リベラル/保守言説が共有しているのは、「北朝鮮」を「悪」として見做す価値観である。こうした言説空間は、朝鮮民主主義人民共和国をひとつの「祖国」とする在日朝鮮人のナショナル・アイデンティティのあり方に何らかの影響を及ぼしているものと考えられる。

【課題B】在日朝鮮人大学生にとっての祖国訪問に関する調査・研究

【課題B】は、【課題A】で指摘したような言説空間に対する問題提起として着想したものである。朝鮮民主主義人民共和国の人民たちはしばしば、自らの存在意義について、国家の自律と発展のために働き、死ぬことであると語る。在日朝鮮人にとっては、当然のことながら、そうしたナショナリズムに同一化することは困難である。社会主義国家建設に直接的に寄与することはできないし、なによりも、資本主義社会に暮らし、生計を立てていること自体が、不平等な搾取関係に甘んじているという点で、共和国におけるナショナリズムとの矛盾を含んでいるからである。

そこで本研究では、祖国を訪問する在日朝鮮人は、そこでの経験を、自らの生活世界に即して、どのように理解しているのかを詳述することで、かれらのナショナル・アイデンティティにあり様を描き出すことを試みる。

【課題C】結婚移住女性にとっての「韓国」経験に関する調査・研究

2000年代以降、在日朝鮮人の「韓国」への想像力は直接的かつ、親密で、情緒的なものへと変貌しつつあり、その結果として、日韓を跨ぐ生活圏が構築されるようになった。在日朝鮮人のナショナル・アイデンティティの現在を論じる際に、こうした時代状況の変化は当然ふまえる必要がある。

そこで本研究では、そうした時代的变化の現れのひとつである、在日朝鮮人女性による結婚移住を対象とし、かのじよたちの韓国での生活をめぐる経験と実践について、その語りを元に検討することとした。

3. 研究の方法

【課題A】

『在日朝鮮人アイデンティティの変容と揺らぎ』(鄭栄鎮)の研究成果に関する批判的検討、小説『ジニのパズル』(崔実)の書評や感想、論争に関する分析などを行

った。

【課題 B】

2015年に、日本の大学教員・大学生を対象とした朝鮮民主主義人民共和国訪問ツアーに参加し、ツアーの旅程や訪問地の内容、現地の案内員の解説内容などについて予備調査を行ったうえで、2017、2018年には在日朝鮮人大学生を対象とした祖国訪問団と同時期に組まれたツアーに参加し、現地での観察とインタビューを行った。調査対象者には、訪問前と訪問後にもそれぞれインタビューを実施し、祖国観や訪朝経験について聞き取った。調査対象者は述べ9名である。

【課題 C】

2015年から16年にかけて、韓国でインタビュー調査を実施した。インタビューは半構造化インタビューで行い、対象者の数は計6名、インタビューは1名につき1回から2回、インタビュー時間は2時間前後であった。調査対象者は韓国籍であること、朝鮮学校で民族教育を受けた経験があること、30代で、10歳未満の子どもを育てていることを基準に選定した。

4. 研究成果

【課題 A】

鄭栄鎮による研究は、1950年代から90年代にかけての、在日朝鮮人運動に関する言説分析を通して、言説内部における民族や国家をめぐる様々な葛藤や議論を、当時の時代背景などに即して理解したうえで、その現代的意義を読み取ろうとしたものである。民族や祖国、帰国、定住などといった、自明のものとされがちな諸概念の中身を具体的に記述することで、「在日朝鮮人」のウチとソトがいかに策定されてきたのか、またそれが時代ごとにより変化してきたのかを描写することに成功している。その姿勢は2000年代以降の構築主義の潮流に強く影響を受けている。新倉貴仁(2008)は、ナショナリズムの構築主義的研究の役割を、ナショナリズム言説が「矛盾し、自壊する地点を見定めること」としているが、鄭による研究は、まさにそうした論点を在日朝鮮人研究領域に導入した初めての本格研究として重要なものである。

しかし、その内容を精査したところ、特に朝鮮民主主義人民共和国に関する言説について、参照されている言説の外部にあらかじめ措定された「実態」に基づく、論者による価値判断がなされていると思われるような分析がなされていることや、戦略的本質主義的な言説に対して、カテゴリー化の矛盾と向き合い、自省しつつ、なおかつ共同性を模索した葛藤の歴史を軽視した、外在的批判が散見された。

『ジニのパズル』は、在日朝鮮人であるジニが、中学から朝鮮学校に転入したが居場所をみつけることができず、なおかつ「テポドン」発射実験直後にヘイトクライムを経験し、自らの置かれた状況に絶望し、指導者の肖像画をベランダから投げ捨て、「北朝鮮」を批判するピラをまき散らす「革命」を起こすというストーリーである。この小説に対しては、リベラルな立場からは多くの肯定的評価が寄せられた。たとえば岸政彦は、朝鮮学校が日本における民族的差別からの「避難地」として機能してきたいっぽうで、民族本質主義的な抑圧構造が存在してという、二重の抑圧構造を暴き出したものとして評価した。たしかに、在日朝鮮人社会内部における民族本質主義によって一部の在日朝鮮人が周縁化・排除される状況は確かに存在するが、岸をはじめとしたリベラル言説は、「ジニ」を一貫して構造的暴力の被害者として描き出すことで、その主体性をなく奪い、政治性を脱色してしまっている。

こうした行為主体を構造から切り離れた議論がまかり通る背景には、「北朝鮮」の「悪しき」政治に対して朝鮮学校生徒は常に受動的であり、主体的な言葉を奪われているという認識があるものと考えられる。

【課題 B】

調査を実施した2017年には、数度の大陸間弾道ミサイルの発射実験や核実験などで軍事的緊張が高まり、2018年には一転して南北/朝米首脳会談が実現し、南北統一への機運が高まった。訪朝した学生たちの動機は主に、実際に自分の目で、そうした祖国が置かれた状況を確認したいというものであった。かれ・かのじよらは、民族自主と統一を謳う共和国にシンパシーをもちながらも、北朝鮮嫌悪に満ちた報道にさらされることで、共和国の政治に懐疑的にならざるをえず、また、統一への機運の高まりのなかでも、周縁に存在するがゆえに、客体的にならざるをえない。かれ・かのじよらの訪朝は、そうした状況を乗り越え、主体性を獲得するための行動であった。

訪朝中に同行する指導員の人民から伝えられる言葉は、あくまでも理念的なナショナリズム言説であった。しかし、かれ・かのじよらは、人民との交流と、訪朝団の学生どうしの対話を通じてその言葉を咀嚼し、「在日」であることを自問したり、学生として将来の進路を模索したりする際に、祖国訪問の経験を踏まえることで、具体的に

祖国が発信する理念に具体的にどのように周縁から呼応することが可能なのかを探っている様子をうかがい知ることができた。

ディアスポラのナショナル・アイデンティティに関しては、マイノリティ社会内部における多様性や文化的差異を強調する議論が多いが、本調査では、スチュアート・ホール(1990)がいうところの「ディアスポラ・アイデンティティ」、すなわち、類似性と差異の二重性の折衷点を模索する様子がみられたという点で、大変意義深いものであった。

【課題 C】

結婚移住女性らは、韓国社会において自らに注がれる政治的／社会的まなざしを「帰還者」(「真の国民」)と「移住者」(「日本人のようなもの」)の二者択一を迫るものとして理解しており、自らのディアスポリックなポジショナリティをありのままに表現／表出することに困難や不可能性を感じているという点で共通していた。また、そうした二項対立的なまなざしを回避することや、ライフコースの安定を図るための実践も読みとることができた。ただし、同時に、母親の在日朝鮮人性を正確に伝え、子どものアイデンティティの揺らぎを未然に防ごうとするなど、子どもとのポジショナリティの違いを考慮し、安定的なアイデンティティ形成を保障しようとする意図もみてとれた。

これらのことから、調査対象者はそれぞれ、在日朝鮮人としてのポジショナリティを自己犠牲的に覆い隠そうとするのではなく、なおかつ、立場の異なる家族員の安定したライフコースを阻害することのないように配慮しながら、韓国社会での生活を営んでいるということができる。しかし、見方を変えれば、日韓両社会が共有するナショナリティをめぐる線引きが、かのじょたちにそうした難しい実践を強要しているともいえる。グローバル化の進展に伴って跨境的な生活圏の構築が可能になった状況において、ディアスポリックな立場にある人々の生活と意識に対する具体的想像力が養われなければならないことを改めて認識することができた。

<参考文献>

鄭栄鎮、2018『在日朝鮮人アイデンティティの変容と揺らぎ 民族の想像／創造』法律文化社。

Hall, Stuart, 1990 “Cultural Identity and Diaspora”, *Identity, Community, Culture, Difference*, 252-260.

橋本みゆき、2010『在日韓国・朝鮮人の親密圏』社会評論社。

倉石一郎、2006『差別と日常の経験社会学——解読する<私>の研究誌』生活書院。

新倉貴仁、2008「ナショナリズム研究における構築主義—ベネディクト・アンダーソンの知と死」『社会学評論』59(3):583-599。

山口健一、2011「在日朝鮮人—日本人間の<親密な公共圏>形成——『パラムせんだい』における『対話』の成立条件検討を通じて——」山口健一編著『GCOE Working Papers 次世代研究 51 在日朝鮮人／在韓中国朝鮮族社会における親密圏・公共圏の変容』京都大学グローバルCOEプログラム 親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点、84-101。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

李洪章、2016、「『研究者の言葉』から『当事者の言葉』へ」『シノドス』vol.196。

——、2016、「『ダブル』の歴史性に関する視角」『ダブル』2016年14号、134p-157p。

(李洪章、2016、「在日朝鮮人のアイデンティティをみる視角：『ダブル』の歴史性に関する語りを通じて」『日本批評』2016年上半期第14号、134-157ページ。)

李洪章、2017、「書評に込めて」『ソシオロジ』62(1)、190-194ページ。

李洪章、2018、「在日朝鮮人女性が経験する「韓国」：結婚移住をめぐる語りを通して」『現代社会研究』第4号、54-72ページ。

〔学会発表〕(計2件)

李洪章、2016、「在日朝鮮人という民族経験」書評シンポジウム「帝国とマイノリティの歴史経験を読み解く」李洪章(2016)『在日朝鮮人という民族経験』(生活書院)を手がかりに、2016年9月(於：上智大学)。

李洪章、2017、「『ダブル』の歴史観——加害／被害の二元論の超克」、人文研アカデミー2017『人種神話を解体する—「血」の政治学を越えて』出版記念連続セミナー、2017年7月(於：京都大学東京オフィス)

〔図書〕(計2件)

李洪章、2016、『在日朝鮮人という民族経験 個人に立脚した共同性の再考へ』
生活書院、272 ページ。

川島浩平・竹沢泰子編著(李洪章他著)、2016、『人種神話を解体する3 「血」の政治学を越えて』東京大学出版会、384 ページ。

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

研究紹介ホームページ <http://leehongjang.net/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

研究代表者氏名：李洪章

ローマ字氏名：**Hongjang, Lee**

所属研究機関名：神戸学院大学

部局名：現代社会学部

職名：准教授

研究者番号(8桁)：**20733760**